

コメニウス生誕四百年記念の旅

—平成3年度海外研修報告—

太 田 光 一

福島県費による海外研修として、1992年3月1日より3月29日までのほぼ1か月間、主としてチェコ・スロバキアに滞在した。一般にはなじみの薄いチェコ・スロバキアを研修地を選んだのは、私が現在研究対象としている17世紀の教育学者ヤン・アモス・コメニウスがチェコ出身であり、ちょうど四百年前の1592年3月28日に誕生したことから、プラハを中心にして様々な記念行事が開催されることになっていたからである。

コメニウスの生涯と活動、コメニウス研究

コメニウスはチェコ兄弟教団の牧師、教師であったが、1618年にプラハから始まりヨーロッパ中を戦火でおおった30年戦争によって祖国を追われ、ポーランドに亡命せざるをえなかった。その後学者として名が知られてイギリスに招かれたが、ピューリタン革命の勃発によりスウェーデンに移った。さらにハンガリーで学校改革にたずさわり、晩年はオランダで執筆活動を続け1670年に没した。戦争の中で流浪の生涯を送り、世界平和のためにすべての子どもへの教育機会の拡大、民衆への学問の普及を祈願した人物である。

西洋教育史の分野では、コメニウスの名はベスタロッチやルソーと並んで著名である。まず彼は様々な教科書の作成者として知られている。彼の執筆したラテン語学習の教科書『開かれた言語の扉』は17世紀のヨーロッパ各国で広く流布し、挿絵入りの教科書『世界図絵』は18世紀のゲーテもそれで学んだほど影響力があった。また就学前の子どもの教育について述べた『母親学校の指針』は、幼児教育の先駆的業績として評価されている。さらに『大教授学』は、すべての子どものために学校をどのように作り、授業をどう進めていったらよいかを述べた画期的な書として著名であり、彼は「近代教育の父」と称されてきた。

コメニウスはチェコ・スロバキアではコメンスキー (Jan Amos Komensky) と呼ばれており、宗教改革者のフスと並んで国民的な英雄とされ紙幣の肖像にも採用されている。チェコ・スロバキアにおけるコメニウス研究はもちろん盛んであったが、彼の人物・思想を総合的に解明しようとする動きが本格化したのは第2次世界大戦後と言わねばならない。コメニウスの生前から第2次大戦の終結まで、彼の祖国は常に政治的に不安定な状態を強いられてきたからである。

コメニウス研究が本格化するのは1957年、『大教授学』の出版三百年を記念した国際会議がプラハで開催されてからである。この時コメニウスの著作が復刻され、コメニウス研究の学術雑誌 (Acta Comeniana アクタ・コメニアナ) も発刊された。また会議を後援したユネスコからもコメニウスの著作集が出版された。その後1970年にはコメニウス没三百年を記念した国際会議が開催され、これを契機にチェコ・スロバキアやドイツで研究が飛躍的に進展したのである。

その当時私はまだ大学生になったばかりでコメニウスのことなど知る由もなかった。ベーコンや

デカルトの学問論・認識論を研究テーマとしていた私がコメニウスに関心を持ち始めたのは80年代以降であり、1992年に生誕四百年を記念した様々な行事が行われることが当然予測できたので、それを目安に研究を進めようと思いついたのである。たまたま県費でチェコ・スロバキアに滞在でき、四百年記念会議に参加できたのは望外の幸運であった。

プロローグ—プラハ訪問と国際学会参加

ところで私がプラハに赴いたのはこれが初めてではない。1985年に日本チェコスロバキア協会を通じて「夏の学校」に参加したのが最初である。これはチェコスロバキアに関心をもつ学生・学者をチェコスロバキア政府の招待で1か月研修させてくれるというありがたい企画であった。

2度目の訪問は1990年の夏である。「国際教育史学会」の会場がその年プラハのカレル大学にあたり、1992年にプラハを訪問することを決意していた私はその予行練習として参加してみた。会津短大への転勤を目前に控えていたためプラハに滞在できたのは学会期間のほんの数日間にすぎなかったが、この参加は私にとって大変実り多かった。

まず第1に、プラハの「コメニウス教育研究所」のチャプコヴァー (D. Capková) さんと知り合いになった。彼女は多くの論文を英文で発表しているので私にとっては非常に馴染みの研究者であった。彼女はこの「国際教育史学会」の全体会で「The work of Comenius—An Inspiration for Today」と題する総括的な報告を行い、私はさっそく自己紹介をして今後の交流を約束していただいた。

第2に、イギリスからこの会に参加していたA. M. O. Dobbieさんに会えた。コメニウスの『汎教育 Pampaedia』の英訳者である年配のその方は、退職後の現在コメニウスの著作を次々に英訳する計画を立てているとのことであり、「私たちもコメニウスの著書を日本語で読めるようにしたいと考えている。それまでの間、私たち日本人にとってあなたの英訳本は非常に有益です」と話すと非常に喜んでくれた。

第3に、カレル大学のリーデルさんと知り合いになった。その方は92年に予定されている生誕四百年記念の国際会議の事務局長であり、その後何度か案内をいただくことになった。

第4に、プラハ在住の日本人女性と知り合いになった。チェコ人と結婚してグラスネロヴァー・大梶優子夫人となっているその方に、その後92年に訪問するときの宿舎の斡旋をしていただくことになるとはその時は思いつかなかった。

そして何と言っても私にとっての最大の成果は、これが海外の国際学会に参加する初めての経験だったことである。私が所属している日本の学会のように詳細な資料や原稿を配布してそれを読み上げるといったスタイルはほとんどなく、A4版の1枚の要旨だけでひたすら雄弁に発表し、あとは

活発な質疑応答、休憩時間はお茶を飲みながら談論、これは慣れない者にとってはたいへん疲れるものであった。様々な国際学会の日本人参加者による報告からある程度予測はついたが、自分で実際に参加するのは得がたい体験であった。

付け足せば、90年夏はいわゆる「ビロード革命」達成の直後であり、1985年の時とは街の雰囲気大きな変化を実感できたのも興味深かった。

コメニウス研究所のチャプコヴァーさんと懇談

さて前置きが長くなったが、以上のような経過を経ていよいよ1992年3月にプラハに向かうことになった。90年夏の訪問は私費で安い航空券を買ったため途中何度も乗り継ぎを強いられた。今回は県費で航空券を求め、しかもソ連上空を飛べるようになったため飛行時間が短縮され、3月1日に成田を発ってその日の夜はチューリッヒで1泊し、翌日プラハに到着、空港には下宿先のボイチェホフスカーさんが出迎えに来てくれ、その後暖房の完備した広い部屋で快適な生活を送ることができたのである。

荷物を解いてまずカレル大学の四百年会議事務局を訪れ、会の準備状況やコメニウス研究の進展についていろいろと伺った。23日から始まる会議のプログラムが出来上がっており、報告者一覧の名簿の中に私の名前もあって安心した。

さっそく「コメニウス教育研究所」を訪問してチャプコヴァーさんにお会いしようとしたが、研究所の受付の婦人は「今日は誰もいない、チャプコヴァーさんはほとんどここに来ない、自宅に直接電話しろ」という返事である。しかたないのでそこを辞し、チャプコヴァーさんの自宅にお電話した。チャプコヴァーさんは日本からの私の手紙を読んで私からの連絡を待っていたようで、電話口で予定表を見ながら「昼間はとても忙しいから、月曜の夜自宅にいらっしゃい」と言う。

ようやく9日の夜再会できたチャプコヴァーさんは、私があらかじめ手紙で書いておいた質問事項に沿ってさっそく英語で議論を始めた。私の質問の中心はコメニウスの遺稿 *Consultatio catholica*（日本ではこれまで『総勸告』と訳されている）についてである。未完成のこの手稿は1935年になって初めて発見され、全貌が1966年にチェコスロバキア科学アカデミーから公刊されて以来コメニウス研究の不可欠の文献となっているものであるが、日本ではあまり知られていない。まず私が日本でのコンスルタチオ研究の現状を紹介した。私が調べたところでは、日本にこの著作の存在が知られたのは1960年に故梅根悟氏がチェコスロバキアを訪問した時であり、その時の案内役はチャプコヴァー女史だと梅根氏の報告記に載っている。そのことを確かめると、「たしかに私が紹介しました。あれは30年以上前、私も若かったですよ」との返事。「でもその後コンスルタチオ研究は日本ではあまり進んでいません」と私が言うと、「(その後プラハを訪問した) 鈴木さんや堀

内さんはコンスルタチオをよく知っていましたよ。」

チャプコヴァーさんがこれまで発表している論文、とくにパンソフィアとパンヒストリアとの関連について尋ねると、「パンヒストリアについては、コメニウスはイギリスに滞在中に構想し、エルビング時代に放棄し、再度またよみがえるというふうに、コメニウス自身もいろいろ変化している」との返事。さらに『言語の扉』と『事物の扉』の関係については、「それはチェコでも60年代は混乱があった、コメニウスには具体的な事物・現象を扱う系列と、哲学的な原理を扱う系列と2種類あったのだ」とのこと。あとコンスルタチオの構造についての話が延々と続いた。「原理から天使の世界を経て人間に行きつき、他の思想家はそこで終わるのだがコメニウスはまた神へと戻ってくる、これはコメニウスに独特だ」と強調された。さらにコメニウスの基本思想の問題に移り、「神の似姿としての人間、これがコメニウスの特徴だ、神と共同すれば人間には完成可能性が残されているし、そうするのが義務だ、これはルター派と徹底的に異なり、ボヘミア兄弟団の特徴だ」という。「コメニウスの中心原理は人間の自発性、多様性だ」とチャプコヴァーさんが強調されるのに対して、「大教授学の著者としてのコメニウスは日本では一斉教授の創始者とみなされ、ベル・ランカスター式の大量授業と同じように考える人もいます」と私が言うと、「そんなことはないですよ」と力説された。ただし「自由と自発性をコメニウスは何よりも重んじたが、しかし秩序との統合も考慮している」とつけ加えられた。また私が「コメニウスはパンソフィアという短い一冊の本を読めば誰でも賢くなれると主張していますが」と問うと、苦笑いしながら「一冊の本というのはメタファーです」と言う。

もっといろいろ聞きたいことはあったが、チャプコヴァーさんはこれからパリに行ってフランス各地を講演して回り、ベルリンにも行って、帰国は22日になるという。これからもよろしく頼むとお願いしてお宅を辞した。外は三日月がこうこうと輝いていた。

アムステルダム、ナールデンへ

さてチャプコヴァーさんと懇談する機会はしばらくなくなってしまった。実は数日前にプラハ市内にある「コメニウス教育博物館」に行ってみたのだが、休館の掲示がかかっていた。コメニウスの全集を販売しているアカデミア書店は工事中で閉まっており、児童書を中心にして新刊書を豊富に揃えているアルバトロス書店も改装中であった。前回来たときにコメニウス関係の書物をたくさん購入することができたカリフ書店には、私がすでに持っている本が数冊おいてあるだけだった。生誕四百年記念で新しい出版が企画されているとチャプコヴァーさんは教えてくれたのだが、それらしい雰囲気は全然ない。そこでいったんプラハを離れてアムステルダムに飛ぶことにした。

アムステルダムは晩年コメニウスが過ごした都市である。1670年に郊外のナールデンという町に

葬られ、そこに博物館もあるはずなのだ。10日の夕刻、横殴りの冷たい雨が降るスキポール空港に到着しアムステルダム市内に宿をとった。ナールデンにはナールデン・ブッスムという駅から行くこと、そのコメニウス博物館は午後2時から4時までしか開いていないこと、数年前にここを訪れた秋田大学の藤田さんから聞いてそれだけは知っていたが、あとは何の予備調査もせずになんとかなるだろうと来てしまったので不安ではあった。

3月11日の朝から行動開始。アムステルダム駅からユトレヒト方面へ4つ目の駅で下車。ナールデンは全体が小さな島である古い町である。コメニウス博物館はすぐ見つかったが、やはり2時まで閉館と掲示してある。小雨混じりの冷たい風が吹きつけるので散策はあきらめ、近くのレストランで食事をしつつ時をすごした。天候がよければすばらしい景色が楽しめたのだろう。

2時になると博物館の入り口にチェコ・スロバキアとオランダの国旗が掲揚された。管理人のプールマンさん、「日本からわざわざ、どうして?」。私が展示室の入り口に大きく掲示してあったコメニウスのモットー「すべては自発的に流れ出る、強制を去れ」を指さして「日本の学校は勉強、勉強で大変なんです。だからあのコメニウスのモットーをいかしたくて」と答えると納得したようだった。この小さな博物館はもうすぐ閉鎖されて大きな博物館に生まれ変わるのだそうだ。5月にはそのこけら落しが行われ、記念集会が催されるとのことであった。

4時になると管理人が鍵束をもって、すぐ近くのコメニウス廟まで案内してくれた。この廟はこれまで写真で何度か見たことはあるのだが、どうも雰囲気がかめなかった。部屋の上部はコメニウスの生涯を描いたステンドグラスでぐるりと飾られている。墓標の周囲に巡らされている鉄の柵には、やはりコメニウスの生涯がレリーフで描かれている。その中でも、燃え盛る炎の中で銃をもった兵士から我が身と手稿を守ろうとしているコメニウスの姿が印象深かった。この廟は、コメニウスがここに埋葬されていることが今世紀になって発見されてからチェコスロバキア政府が製作したのである。墓標には最近ここを訪れたハベル大統領の献花が添えてあった。



ナールデンのコメニウス廟

礼を言って別れてからこの島の入り口にあるコメニウス像を写真におさめ、ちょうどうまい具合

にやってきたアムステルダム市内行きのバスに乗り込んだ。雨足はますます激しくなり、ホテルに着く頃はドシャ降りとなっていた。

翌12日はコメニウスが滞在していたというアムステルダム市内の建物を見学した。前日プールマンさんに教えてもらったカイザースグラフト123番地はすぐ見つかった。「チェコの教育者ヨハン・アモス・コメニウスが1656年にここに滞在した」というプレートがはめこんであるその建物は、1656年にポーランドのレシュノを焼け出されたコメニウスがオランダの豪商デ・ヘールを頼って最初に落ち着いた場所であり、実際に晩年を執筆で過ごした住まいは別にあるらしいのだが、そこは特定できないというのがきのうの説明だった。雨はますます激しくなり私の傘の骨も折れてしまい、市内探訪はあきらめた。翌13日も雨がひどく午後にはプラハに戻ったのである。

生誕地ウヘルスキーブロット、ニヴニッツへ

私の次の予定は、ウヘルスキーブロットを訪問することであった。この町はコメニウス生誕の町とされ、機関誌まで発行しているりっぱな博物館が存在する。私は数年前からこの博物館と文通しており、生誕四百年記念にこの地をぜひ訪問したいと考えて日本から手紙を出しておいた。ところが、3月28日の誕生日に記念式典があるからその時来なさいという返事であった。そうしたいのはやまやまであるが、私にはそうできない事情があった。というのは、私は平成3年度の海外研修費で来ているため、年度末には帰国・出勤しなければならないのである。飛行機の便を考えると28日に訪問するのは不可能であった。プラハから確認の電話を入れると「今来ても何も見るものはないですよ」という返事。「それでもかまわないから行きます」と強引に頼みこんで3月18日に出かけることにした。この時には、

京都在住の井ノ口淳三さんがやはり四百年記念会義に参加のためプラハに到着していた。井ノ口さんはこの数年来の友人で私をコメニウス研究に誘ってくれた先輩でもある。ウヘルスキーブロットには彼と2人で行くことに



藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』より転載

なった。

ウヘルスキーブロトは、プラハの南東へ直線で270kmの南ボヘミアの人口1万7千ほどの町である。直通のバスもあるのだがそれだと7時間もかかるので、まず8時発の急行バスでブルノまで行き、そこからローカルバスに乗り換えて午後1時すぎ到着した。

バスの窓から街道沿いの建物の壁にコメニウスの顔と「コメニウスの町」という文字が目にとまり、気分が高まってくる。今日中には帰れないだろうからまず宿を確保することにした。教会前の広場に面したホテルは1泊126コルナ、日本円にしたら600円ほどで、プラハ市内の外国人観光客相手のホテルは最低でも150ドル、2万円以上と相当違う。安いだけあってバストイレなしの狭い粗末なベッドの部屋であった。宿の婦人に教えてもらった坂を少し登るとすぐ左手にコメニウスの像と博物館が見えた。誕生地ウヘルスキーブロトのその大きな立像と同じものが、埋葬地ナールデンにも据えられていたのを思い出した。

博物館の扉は心配していたとおり閉まっていたが、道を隔てた向い側の建物の研究所で案内を請うと、博物館の方向からジーンズにブーツの若い女性が走ってきた。

「あ、オタ、コイヒさんですね？」と歓迎してくれたその方は、ここの研究員で、記念式典準備の責任者であるフスコヴァーさんで、「とにかく今忙しい」と断りながら館内を見せてくれた。

博物館の中はどの部屋も改装中であった。ハベル大統領もやってくるという28日の式典を控えて突貫工事といった趣である。まずホールに通されると、ちょうどコメニウスのスライドの試写をしていた。コメニウスの生涯をパネル構成にした部屋、当時の学校風景と未来の学校をイメージした部屋などが準備中で、未来の学校は各

机にコンピュータが据え付けられ、ハイテクを駆使した授業をするように見受けられた。図書室では、貴重本を収めるガラスケースが準備中で、壁側の棚には私が昨年送っておいた『日本のコメニウス』が展示されていた。井ノ口さんが自分の翻訳した『世界図絵』を渡すと、さっそくここに展示すると約束してくれた。中庭はコンサートホールになるそうである。ここで発行されている資料をたくさん買い求め、忙しい中を押し掛けた非礼をわびて博物館を後にした。準備の過程を見れるとは、思いがけない幸運であった。

翌日コメニウスゆかりの家や工事中の「コメニウス通り」などを写真に収め、博物館を再度訪問して改めてお礼を述べ、さてプラハへ帰る段になったのだが、井ノ口さんが「せっかくここまで来

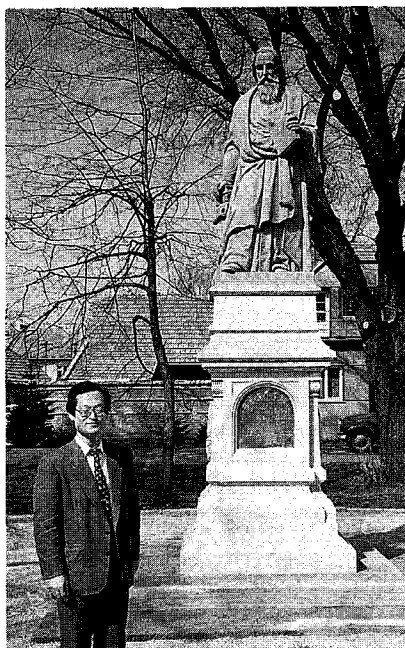


ウヘルスキーブロトのコメニウス博物館前

たのだから、コメニウス縁の地をもっと訪ねて見よう」と言いだした。国内旅行のときでも時刻表を子細に検討し宿を予約してからでかける私は多少ためらったが、こういう機会は2度あるかどうか分からないので思い切ってでかけることにし、最低、コメニウスが少年時代学んだプシェロフと、教師として青年時代を送ったフルネックくらいは回ってみようということになったのである。

ホテルの婦人に尋ねるとプシェロフ行の列車が出るまで多少時間がある。隣村のニヴニッツまでは6kmだというのでタクシーを呼んでもらうことにした。「日本人が2人、そう、でも少しはチェコ語も話せるから。コメニウスの記念碑を見て、それから12時25分の列車でプシェロフへ行くんですって。お願いできる？」そんな電話で呼び出されたタクシーの若者はニヴニッツにはまったく不案内であったが、車の窓から通行人に道を聞きながら村内を走ってくれて、短時間であちこちを見学することができた。

コメニウスの生誕地はウヘルスキーブロットということに一応はなっているが、実は確かな証拠はないようである。両親が住んでいたというこのニヴニッツも生誕地の可能性が強いと言われている。偶然にも「コメニウス教育図書館」という看板を見つけて道を問うと、そこのブラジェナさんという女性が一緒にタクシーに乗り込んで村を案内してくれた。村の小さな公園に立っているコメニウスの像、ボヘミア兄弟団の建物跡、展示館など。ブラジェナさんは帰りがけに『コメニウスとニヴニッツ』という大部の本を売ってくれた。



ニヴニッツのコメニウス像

青春時代を過ごしたプシェロフ、フルネック

次にウヘルスキーブロットから列車で1時間半弱、プシェロフ駅に到着。プシェロフからはプラハ行の急行も頻繁に出ており、人口も5万5千人である。駅前のホテルで宿を確保してから駅員にフルネックまでの便を尋ねると、夕刻までにはプシェロフに戻って来れそうだったので、プシェロフの探索は翌日にして先にまずフルネックまで行ってみることにした。フルネックは1両編成のローカル列車しか止まらない非常に小さな駅であった。

駅前の案内板を見てまず川の右手を登ってコメニウス像を見物し、次にまた川を渡って街中の小さな広場へ出た。広場に面した市庁舎にはコメニウスの肖像画の垂れ幕がかかっており、商店の窓

にもコメニウスのポスターが張ってある。

「1618年から1622年までこの学校にコメニウスがいた」というプレートがはめこまれている、広場に面した高台の建物で、新婚のコメニウスは牧師として教師としての人生のスタートを切ったのだが戦争による宗教迫害のため彼はこの地を去らねばならず、その間に妻も幼子も病で失ったのである。そのすぐそばの建物がコメニウスの記念館になっており、扉をノックするとペンキだらけの作業服を着た男性が顔をだし、「今工事中で入れないよ。今度は土曜日」とすぐドア閉めてしまった。もう5時を過ぎていたので無理に押し入るのはやめ、中庭のコメニウスの像を写真におさめるだけであきらめた。その庭にもしきつめた新しい砂利の上にローラーの跡がはっきり残っており、工事の道具が置かれてあった。後で知ったのだが、ウヘルスキープロトの28日の式典を頂点にして、コメニウス縁の地で次々に式典が催されることになっており、ここフルネックでは21日の式典に向けて改装工事中だったのである。広場の書店で『コメニウスのフルネック』という本と絵葉書を買って求め、夕暮れのなかをゆっくり列車にゆられてプシェロフのホテルへ戻った。

翌3月20日はまずプシェロフのコメニウス博物館に向かったが、果たして閉館であった。この博物館はかなり規模が大きく、館長のヒーブル氏は秋田の藤田さんと交流がある。プシェロフに来るのであれば藤田さんに紹介状を書いてもらい見学の予約もしておくのだったと悔やんだが、後の祭である。行き当たりばったりで来たのだからしかたがない。未練がましくずうずう

しく隣の建物に入って、「この本はヒーブルさんへのお土産だ、お帰りになったら渡してくれ」と『日本のコメニウス』を差し出した。そこの婦人はどこぞに電話をしている。変な日本人が来たからどうにかしてくれと言っているのかもしれない。すると元気のいい若い女性がやってきた。「私は英語が少しできるから通訳してあげましょう」というのである。そこで簡単に用件を告げると、その女性はしばし待つように私たちに命じてから「すべてうまく行きましたよ！博物館の見学ができます」と戻ってきた。ラダさんというその女性は、この地域のミニコミ紙の記者であり、私たち取材するという名目でボスから時間をもらってきたというのである。

いっしょに博物館へ向かうと入口に学芸員のピースコヴァーさんが待っていてくれた。

この地域の教育の歴史とコメニウスの業績との両方を展示しているこの博物館を、ピースコヴァーさんとラダさんは隅から隅まで案内してくれた。展示物の説明の度に、ピースコヴァーさん



フルネックのコメニウス像

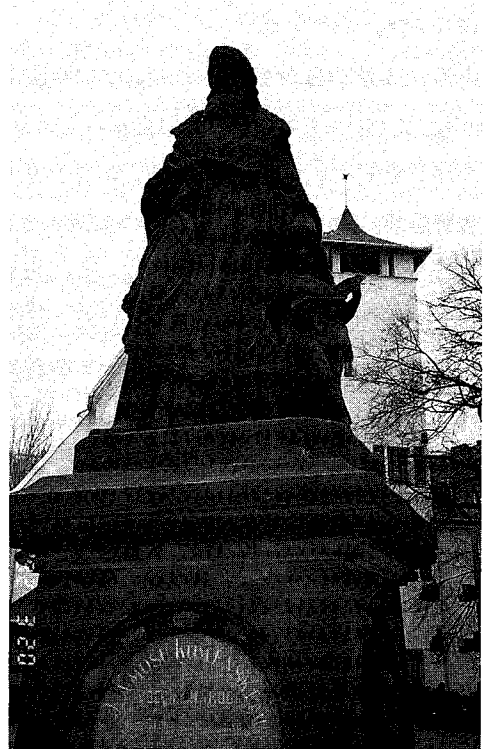
は「オリジナル、オリジナル」を連発する。ラダさんの決まり文句は「ヴェリー・インポートント」である。ここにしかない、他の博物館にはないコメニウスの貴重な資料がたくさんあるというのである。私が「ウヘルスキーブロットにも行ってきたんですよ」というと、即座に「あそこはオリジナルはあまりありませんね」という返事が返ってきた。確かに、プシェロフは16歳になったコメニウスが本格的に学校教育を受けた町であり、かつ、ドイツ留学から帰った22歳のコメニウスが母校の教師として活動した町である。住んでいたという証拠がはっきりしないウヘルスキーブロットとは格が違うということなのかもしれない。この博物館の1番の自慢の「結婚の証明書」、コメニウスが作成したモラビア地方の地図、『世界図絵』

の初版、『汎覚醒』のハレ版、それにナールデンのコメニウスの墓に敷き詰められているのと同じ砂、等々。ちなみに、それらの展示室もみな改装中だった。また、チェコの古い学校配置図とか昔の教室風景の展示も興味深かった。ラダさんが「ここは特にヴェリーインポートントです」という展示室は「スターリン時代の教室」というのであった。

四百年記念会義に参加するというピースコブナーさんとはプラハでの再会を約束して別れ、あとはラダさんが町の中を案内してくれた。この街はコメニウスをたいへん誇りに思っていること、コメニウスの名にちなんだ学校や通りがあること、コメニウスの像はここが世界で一番古いということ、等々。たしかに、プシェロフの博物館で買い求めたパンフによれば、チェコ・スロバキア国内に実におびただしい数のコメニウス像が設置され

ているが、プシェロフの広場にある像は1874年製作で一番古いという。さらに話は最近のチェコ・スロバキアの政治的激動の話題となった。

思ったよりも成果のあった小旅行であったと井ノ口さんと2人で勝手に悦にいてプシェロフ発の列車に乗り、4時間弱でプラハのホレショヴィツェ駅に着いた。途中から雨となり、旅行中好天だった幸運と、多くの人々の親切に感謝せざるをえなかった。



プシェロフのコメニウス像

四百年記念国際会議

3月も後半になると、時々小雪がちらつくことはあってもプラハ市内は活気が出てきた。街は冬の眠りから覚めて春を迎える準備に忙しく、観光客も目だってきた。85年、90年に訪れた時には、土、日はほとんどのお店が閉まっていたらしくに買物ができなかったのに、今回は繁華街の商店はお土産をとりそろえて待ちかまえていた。資本主義市場経済の表れであろう。ボヘミアガラスの店と「両替します」の看板がやたらと目についた。3月初めには閉店していて私を途方に暮れさせた書店も、新装オープンし始めた。ショーウィンドウにはコメニウスのポスターや新刊書が飾られるようになった。

さて、3月23日から27日まで、“COMENIUS’ Heritage and Education of Man for the 21st Century (コメニウスの遺産と21世紀の人間の教育)”と銘打つていよいよコメニウス生誕四百年国際会議が始まった。前日には秋田大学の藤田さんが刷り上がったばかりの私たちの本『コメニウスの教育思想』(法律文化社)をカバンに積みこんでプラハに到着した。会議場の「文化宮殿」は、レンガ造りの古い建築が立ち並ぶプラハには珍しいガラス張りの、様々な会議やイベント会場に使われる大きな建物で、プラハの新名所になっている。

初日の23日はハベル大統領も出席して開会式が行われ、夕刻からはコンサートが催された。受付には生誕四百年に合わせた様々な出版物やポスター、記念メダル、その他のコメニウス・グッズの販売コーナーが設けられた。チャプコヴァーさん、ウヘルスキープロトのフスコヴァーさん、プシエロフのピースコヴァーさんにも再会できた。プシエロフの館長のヒーブルさんには「留守して失礼しました」と挨拶され恐縮した。『コメニウスの教育思想』の共同執筆者である京都の佐藤さん、弘前の秋葉さん、東京の吉岡さんなども合流した。会議場の外のフロアでは「コムクスボ92」という催しが始まった。これはコメニウス生誕四百年会議に合わせて企画された教育機器の展示会である。そのほとんどがコンピュータを使ったものであった。

2日目の24日からは分科会が始まった。分科会は全部で7つある。「1. 21世紀の教育。2. 子どもの発達と子どもの権利。3. 情報工学と教材。4. コメニウスの幼児教育と今日への遺産。5. コメニウスと言語教育。6. コメニウスと「人間に関わる事柄」。7. コメニウスと教会の活動。」他の分科会が、コメニウスに引き寄せながら教育問題一般を扱うのに比べて、第6分科会が固有のコメニウス研究に当てられた分科会であることは明らかであり、私はこの分科会に発表を申し込んでいる。司会はチャプコヴァーさんとドイツのコメニウス研究の第1人者クラウス・シャラーさんである。

分科会場の中央には大きな楕円形のテーブルが置かれ、5、60人分の立派な椅子の前にはそれぞれマイクとイヤホンが備え付けてある。テーブルの回りに座りきれない人のために後方にこれも立

派な椅子が用意してあり、そこに座る人は通訳用のトランシーバーが利用できるようになっていた。いかにも国際会議用の会場である。

チャプコヴァーさんのあいさつの後
シャラーさんの報告



分科会場—中央が筆者

が始まったが、これがドイツ語である。急いでイヤホンに耳を当てたが、チェコ語しか聞こえてこない。コメニウスとベーコンの関係という私にとっては非常に関心のあるテーマなのだが、要旨も配られていない。次はチャプコヴァーさんの報告。発表はチェコ語でありイヤホンからはドイツ語が流れている。これは困ったことになったと思った。私は耳で聞いて内容がすぐ分かるほどドイツ語とチェコ語に堪能ではない。お二人とも英語がペラペラなのだから当然英語で発表してくれるものと思い込んでいた。その後チェコの研究者の報告がいくつか続いたが、ほとんどがチェコ語、通訳はドイツ語だけである。周囲を見渡すと、イヤホンを何度かいじくりまわしてあきらめている人もけっこういるようだ。休憩時間に話しかけると「いやあ、私もよく分からない」と言う人が何人かいた。

通訳についてはその後おかしな事態が相次いだ。その日の午後若い女性がやってきて、「英語が必要な日本人はあなたですか」と私の横に座って通訳を始めた。しかしこれでは回りにうるさいし、他にも英語の翻訳が必要な人がいるのである。後で知ったのだが、藤田さんが事務局にたいして英語の通訳をつけてくれと苦情を申し入れたのだった。英語の通訳がちゃんとついている分科会もあるらしい。彼は「ぼくだけでなくあなたも苦情を言え」と私にけしかけるので、事務局長のリーダーさんに申し入れた。

その効果が現れたのか、翌日は専門の通訳がやってきてイヤホンから英語も聞こえるようになった。しかし時々「翻訳不可能」「これはラテン語の引用なので分かりません」「申し訳ないがどうしようもありません」という台詞が入り、吹き出しそうになった。休憩時間、通訳の婦人がやってきて「よく分かるか」と私に尋ねた。「あなたはそれなりによく通訳してくれているが、ここのシステムがちょっと……」と私が応じると、待ってましたとばかりすごい勢いで話し始めた。「だいたい報告の原稿はもらっていないし、話すのは速いし、誰が話しているのか順番は分からないし!」「私は今までいろんな国際会議の通訳をしてきたが、こんなにひどいのは初めてだ。これがコメニウスの会

議か、ステュピド!」「アイ・アム・アングリィ!司会はいったい誰ですか。」

そのうちさらに不思議なことが起きた。係の人が「あなたの報告は日本語かチェコ語か」と尋ねるのである。もちろん英語だと答えた。日本語で報告してもしようがないじゃないか。ところが若い男性が、「私が通訳しますから日本語で発表して下さい」と言うのである。私はますます驚き、「英語でやるから」「じゃあ英語からチェコ語に訳しましょう。原稿をください、いつ報告ですか」「それが私も分からない。」

そのうち報告予定者なのに欠席している人が何人かいて、予期せずして私まで順番が回ってきた。私はとっさにアドリブで「コメニウスは世界共通言語を構想したが、現在私たちはその恩恵に浴することができない。チェコ語で発表するのは私にむずかしい。日本語で発表したらみなさんには理解不可能であろう。しかたがないので英語で発表することをお許し願いたい」とここまではチェコ語で話し、後は英語で「The Reception of CONSULTATIO CATHOLICA in Japan」と題して日本のコメニウス研究の現状を報告した。イヤホンからは私の報告がチェコ語で通訳されたのではないかと思う。

そういうわけで、会議の場で報告を聞き討議に加わるというよりは、もっぱら休憩時間などに個別に質問して補うことにならざるをえなかったが、しかしそれは私にとってかなり有意義であった。コメニウスとイギリスの関係を報告したクンペラさんは前から論文を通して名前を知っていたので、今後の交流を約束できたし、シェフィールド大学のヒッチンズさんという方とも知り合いになれた。私の報告が終わるとスペインやドイツの人からもさらに意見を求められたりした。デカルトの報告をしたシュトルコヴァーさんはプラハのコメニウス博物館の学芸員であり、コメニウスの思想研究におけるヤン・パトチカの業績を力説した。そういえばチェコ人の報告には「パトチカ曰く…」という表現が頻繁に登場した。彼はコメニウスの哲学研究の第一人者であったが、チェコの民主化運動の旗手であったため晩年は弾圧され、最近復権したのだそうである。私も彼の本は持っている。彼への政治的評価とは別に、彼の研究をきちんと検討してみる必要を痛感した。

国際会議は3月27日の全体集会で閉幕である。朝起きたら雪が積もっていた。会場で、いろいろお世話になった方や知り合いになった方と別れを惜しんだ。最後の晩は下宿先のボイチェホフスキーさん一家が「クリスマス用の特別料理」で歓送会をしてくれた。日本食が恋しくなることもなく、寒くて狭い我が家に帰る気がしないほど快適な1か月間だった。またぜひプラハを訪問することを約束し、日本時間の29日無事成田に到着した。

エピローグ——イギリスへ、そしてまたプラハへ

平成3年度の海外研修はそれで終了したわけだが、その後日譚があるのでそれもついでに書いて

おこうと思う。

帰国してすぐ、プラハで知り合いになったヒッチンズさんから手紙が届いた。7月にイギリスのシェフィールド大学で国際会議があるから参加しないかというのである。

先に述べたように、コメニウスは1641年から42年にかけてロンドンに滞在した。それはほんの半年ほどであったが、50歳を迎えようとしていたコメニウスに深い印象を与え、その後の彼の思想形成に決定的な影響を与えた。そのへんの経過は、コメニウスをイギリスに招いたサミュエル・ハートリブという人物の書簡やら手稿やらが20世紀になって発見され、その中にコメニウス関係の文書が大量に含まれていて分かったのである。

最近そのハートリブ文書研究に新しい段階が訪れた。すなわち、1987年、文書が保管されているシェフィールド大学に特別プロジェクト (Hartlib Paper Project) が組織され、整理事業が始まったのである。今回の会議は、そのプロジェクトの中間報告の意味で、コメニウス生誕四百年も記念して開催されるというのである。もともとコメニウスとイギリスの関係について非常に関心を持っていた私はすぐに参加の手続きをした。

ほぼ同時期、私の指導教官であった東大の堀尾輝久先生から、7月にプラハで国際比較教育学会があるので参加しないかというお誘いがあった。私がしばしばプラハに出かけていることを知ったの上でのお誘いである。どうせヨーロッパに行くのならついでだからとこれも参加手続きをとった。もちろん今回は私費参加である。7月5日に成田を発ってその晩はロンドンで一泊し、シェフィールドで3泊したのちプラハで4泊、7月14日に帰国というあわただしい日程であった。

シェフィールドはロンドンから列車で約2時間半、19世紀の産業革命期に発展した人口50万の小都市である。古いレンガ造りの建物と緑の中に大学の建物が散在している。

ハートリブ文書プロジェクトの事務局では、25,000ページに及ぶこの文書すべてをコンピュータ処理してCDに収め、活用できるようにする作業がほぼ完成にさしかかっており、1993年に発売が予定されているという。これは、コンピュータの画面上で、①文書のデータ（絵、図、手稿など）をイメージ通りに再生でき（拡大縮小自在）、②それを活字体で読むことができ、③しかも英訳でも読むことができる、というもので、それらを時間の流れやテーマ別、キーワードごとに検索できるように作られている。完成後には大きな成果が期待されるであろう。

The Hartlib Paper Project International Conference Peace, Unification, and Prosperity The Advancement of Learning in the 17th century（ハートリブ文書プロジェクト国際会議、平和・統合・繁栄、17世紀における学問の進歩）をテーマに開かれた会議の参加者は約125人、その全員がシェフィールド大学のアーンショーホールで食事・宿泊を共にし、朝から夜までみっちり討論するのである。これは私にとって大変すばらしい、しかもストレスを伴う経験だった。プラハの会議のときはチェコ語が堪能でなくともまあ何とか大目にみてもらえた。ドイツ語が聞き取れないのも私

一人ではなかった。ところがここではすべて英語で、しかも小人数で顔つき合わせて会議するのである。

チェコからはチャプコヴァーさんとクンペラさんが参加していて、2人の発表はよく分かった。アメリカ人の発表したコメニウス研究はあまり水準が高くなかった。しかし、17世紀のピューリタン革命期に非常に幅広い活動をしたハートリブとその周辺の人物についての個別研究報告は、固有名詞や背景に馴染がないこともあって、理解が困難であった。もう一人の日本人参加者であった筑波大学の相馬さんと、確かめあいながら会議に臨んだものである。

イギリスで疲れ果てたので、7月9日からのプラハでの国際比較教育学会にはあまり精力をさかず、プラハ市内を堀尾先生に案内したり、書店をのぞいたり、ボイチェホフスキーさん一家と再会を祝したりして、7月14日に帰国したのであった。

帰国後の8月21日付朝日新聞に、私のルソー研究の師であった小林善彦先生が「なぜ下手か日本人の外国語」と題して外国の学会の参加記を書いておられる。国際会議の場では「1. 自分の考えを論理的に表現すること。2. 遠慮せずに議論に割りこむこと。3. 他の人とひと味違った発言をすること。4. 5分に1度は聴衆を笑わすこと」が大事だということである。まったくその通りである。しかもこれは、外国語の会話がそうとう上手である外にさらに必要な条件なのであるから、私が今後しなければならないことは多い。もっと国際会議で発表できるように努力したいと痛感した次第である。ともかく有意義なコメニウス・イヤーであった。